



# 瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部  
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



今日のみことば

受難の主日 A年(2023年4月2日)

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：イザヤ書 50章4—7節

第二朗読：フィリピの信徒への手紙 2章6—11節

福音朗読：マタイによる福音書 27章11—54節

## しゅ しもべ うた 主の僕の歌

『イザヤ書』には「主の僕の歌」と呼ばれる歌が四つあります。今日の第一朗読は、「主の僕の第三の歌」から採られています。

「主の僕の歌」はすべて『イザヤ書』40章以降に記されています。『イザヤ書』は長い時間をかけて成立していった書物ですので、三つの部分に分けて、それぞれ第一イザヤ、第二イザヤ、第三イザヤと呼んでいます。「主の僕の歌」は、第二イザヤの部分に位置します。バビロン捕囚からの喜びを告げる箇所です。

主の僕の第一の歌(42章1-4節)：ここで歌われる僕は「叫ばず、呼ばわず、…傷ついた葦を折ることなく、暗くなってゆく灯心を消すこと」のない、優しい救い主の姿です。直前に登場する別の僕、「陶工が粘土を踏むように…支配者たちを土くれとして踏みじる」の姿とは対照的です。この主の僕は、「完全な裁きを導き出す」(42章1節)方なのです。

主の僕の第二の歌(49章1-9節)：ここでの僕の使命は、神の言葉を語ることです。彼は、神さまの御旨を告知する「口」で「鋭い剣」のように激しく神の言葉を語ります。こうして彼は、イスラエルを神さまに立ち返らせます。「ヤコブの諸部族を立ち上がらせ、イスラエルの残りの者を連れ帰らせる」のです。ですから、この主の僕は「国々の光とし、わたしの救いを地の果てまで、もたらす者」なのです。

主の僕の第三の歌(50章4-11節)：今日の第一朗読を含む部分です。この主の僕は、イスラエルに多く登場した預言者たちを指しているのかもしれませんが。預言者たちは迫害され、為

政者<sup>せいしや</sup>と民衆に苦しめられました。同じように主の僕も、忍耐<sup>にんたい</sup>と苦しみの生活を送らなければならないのです。

主の僕の第四の歌(52章13節-53章12節)：この主の僕において、僕の苦しみの意味が明か<sup>あきら</sup>にされます。「彼が刺し貫<sup>さ</sup>かれたのはわたしたちの背<sup>そむ</sup>きのためであり、彼が打ち砕<sup>う</sup>かれたのは、わたしたちの咎<sup>とが</sup>のためであった」(53章5節)。人類の罪の身代わり<sup>つみ</sup>のために苦しみを受けたのです。「わたしたちの罪をすべて、主は彼に負<sup>お</sup>わせられた」。

主の僕は優しい人柄<sup>やさ</sup>で、神の言葉を語り、人々から迫害<sup>ひとがら</sup>され、人々の罪のために苦しみを背負<sup>せ</sup>うのです。

今日の第一朗読で、なぜ主の僕は迫害<sup>た</sup>に耐えたのでしょうか。東京教区の雨宮神父さまの解説<sup>かい</sup>を参考<sup>せつ</sup>にしましょう。今日の朗読箇所をじっくり読んでみると、主の僕と神さまとの関係<sup>あき</sup>が明らか<sup>あき</sup>になっていきます。4節から5節の前半を直訳<sup>ちよくやく</sup>してみると次のようになります。

主なる神は私に与<sup>あた</sup>えた 弟子<sup>でし</sup>の舌<sup>した</sup>を  
知るために 疲<sup>つか</sup>れた人を助けることを  
言葉を彼は呼<sup>よ</sup>び覚<sup>さ</sup>ます  
朝に 朝に  
彼は呼<sup>よ</sup>び覚<sup>さ</sup>ます 私の耳を  
聞き従<sup>きしたが</sup>うために 弟子<sup>でし</sup>として  
主なる神は開<sup>ひら</sup>いた 私の耳を

この僕は、朝ごとに神さまとの関わり<sup>かか</sup>を新<sup>あら</sup>たにしたのです。開<sup>ひら</sup>かれた耳で神さまの言葉<sup>き</sup>を聞き、与<sup>あた</sup>えられた舌<sup>した</sup>で疲<sup>つか</sup>れた人々を助けるのです。

5節の後半に「わたしは逆<sup>さか</sup>らわず、退<sup>しりぞ</sup>かなかった」とあります。朝ごとに新たにされる神さまとの関わりについては「逆<sup>さか</sup>らわず」、6節以降の迫害<sup>しりぞ</sup>に対しては「退<sup>しりぞ</sup>かなかった」のです。